

石川さんの思い出（2）

こうして「思い出」を書き始めると、いろいろ頭に浮かんできて寝不足になってしまふ。昨晚も彼から「甘口コメント」をもらったことがどうも気になり、途中で起きて探した。

2月22日の私の最終講義の資料の中から、彼のコメントが出てきた。当日、講義の感想やメッセージなどを参加者に書いてもらい、回収箱に入れてもらった。彼らしく、じつに詳しいコメントであった。社会調査実習の中間報告会などでも、彼はびっしりと厳しく的確なコメントを書いていたのを思い出す。

すこし恥ずかしいが、彼のコメントを要約して紹介しよう。

辛口のコメンテーターに辛口のコメントなどと考えていたが、（講義を聴いて）そういう気持ちは後景にしりぞいた。「行動する研究者」ということがわかり、深い感銘を受けている。調査研究・教育・メディアでの発言、どれをとっても。個人的なことを言えば、先生の行動力ゆえに、調査実習石川班（2012）も石川ゼミも救ってもらったことがよくわかる。

辛口コメントの註として、批判（診断書）はその通りだとは思いつつ、ではどうするか（処方箋）、とくに予算などについてのくわしい話がもっとほしいなど。もっともな指摘である。



写真は講義を始める前に教室の様子を撮ったものの一部である。石川さんは講義開始のかなり前に車椅子で来て、さっと階段教室の中ほどまで上がっていった。彼の周りには学部や大学院の卒業（修了）生たちが話に来ていた。

この日は北風が強く吹き、教室も肌寒かった。彼が車椅子で来てくれるとは思っていなかったが、やはり嬉しかった。教室の最前列には、人工呼吸器をつけた京ちゃん、そして中ほどには車椅子で真剣にメモをとる石川さん。そのメモをもとに、「甘口コメント」を書いてくれた石川さん。7月31日のレポートに「最終講義と京ちゃん」を書いたが、今回のテーマは「最終講義と石川さん」としたい。



もう一枚の写真は最終講義が終わり、1階会議室で卒業生に囲まれてほほ笑む石川さんである。この時はいつになく、にこやかに卒業生らと歓談していた。寒いなか最終講義に来て、「甘口コメント」を書いてくれた石川さんに、あらためて感謝したい。

（2014年8月5日）